In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(第 6 章)専門職の視点と経験者の視点の「溝」を学ぶ
Author	髙橋 康史, 加藤 汐梨, 藤田 桃萌, 林 純太朗, 有賀 大雅, 葉田 愛美, 杉田 彩夏
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 18 巻, p.63-72.
Published	2020-03-15
ISBN	978-4-904010-33-4
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	刑務所出所者等の意思決定・意思表示の難しさと当事者の声にもとづく支援
DOI	10.24544/ocu.20200615-011

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第６章

専門職の視点と経験者の視点の「溝」を学ぶ

髙橋康史・加藤汐梨・藤田桃萌・林純太朗
有賀大雅・葉田愛美・杉田彩夏

１　当事者の知を学ぶ試み

先に論じた「社会福祉専門職による意思決定支援に関する覚書」では、社会福祉の視点から当事者の意思決定支援において専門職の視点と当事者の視点の溝を専門職が認識することの重要性を確認した。名古屋市立大学人文社会学部髙橋康史ゼミでは、社会福祉学を学ぶにあたってこのような専門職の専門知と当事者の経験知の溝について理解を深める必要性を認識した。そこで、次のようなフィールドワークを行った。

私たちは、ある少年院を訪問した。そこで、職員の方から少年院の現状と現代社会における非行少年への臨床的アプローチの実際を学んだ。そのうえで、Ｋくんにインタビューをした。Ｋくんは、大阪府Ｘ地域出身の 30 代後半の男性である。Ｋくんは、少年院に３回・刑務所に２回入所した経験がある。以下から、Ｋくんの語りを記述することで、当事者の経験知を確認していく。そのうえで、少年院での学びと比較し、どのような溝があり、そこから何が学べたのかを報告する。

こうした内容の研究を設計し、ゼミで取り組んだ意図は、第〇章で論じたように、意思決定支援においては当事者の視点を理解すること以上に、専門職の専門知と当事者の経験知の溝を自覚することが重要な意味をもつからである。このゼミには、社会福祉士の資格の取得を目指している学生が在籍していたこともあり、こうした共同研究を実施するに至った。

（髙橋康史）

２　当事者の語りを聞き、学ぶ

図１はＫくんの人生の中で大きな出来事を年表にまとめたものである。小学生時代は祖母の家で暮らしており、両親はあまり家に居なかった。中学校に上がると、薬物の使用や暴走などの非行行為が始まる。18 歳で暴走族を卒業しても薬物の使用は続いており、これが原因で成人後 2 度逮捕される。2 回目の出所後、現在の妻と出会い、子どもを授かる。それを機に、薬物の使用や、反社会的勢力との関わりを絶ち、現在に至る。

図１　Ｋくんの人生

年齢	出来事
小学校	・祖母の家で生活
12歳	・シンナーの使用 ・バイクで暴走
14歳	・鑑別所に入所 ・教護院に入る
18歳	・シンナーから覚せい剤へ ・暴走族の卒業
26～27歳	・覚せい剤をやめる
29歳～	・刑務所から出所 ・嫁さんとの出会い ・第1子の誕生 ・すべての薬物を絶つ ・建築会社に入社

2-1　幼少期

Ｋくんは、小学生時代を祖母の家で過ごしていた。中学校に上がると、両親の元で暮らすようになるが、両親はほとんど家におらず、食事も十分に与えられなかった。その頃をＫくんはこう語る。

小さい頃貧乏だった。親父もおかんも家にいなかった。（親が）どこ行ってたかは知らない。（空腹時）俺が元気な時はスーパー行って万引きしてくる。

このことから、非行へ足を踏み入れたきっかけは貧困であったと考えられる。

2-2　中学入学

Kくんは、自身の非行行動について思い出と共に語っていた。中学に入るとKくんは仲間とつるむようになり、暴走やシンナーを始めたと語る。

中学の時はシンナーとかやったら結構補導。最終的に捕まったんが、シンナー窃盗みたな。工場入って、シンナーパクって、鑑別所入ったな。15くらいの時。

Kくんは、薬物が蔓延しているような地域に出向き、そこにいけば簡単に薬物を手にすることができたという。薬物は、仲間と共同で購入し、大金が入ってきた際は一人で購入することもあったと語る。Kくんは薬物を遊びで使っていた。依存症状に苦しんだ経験は無く、娘が生まれた時に薬物全般を断っている。

Kくんが暴走や薬物に使うお金は、強盗や薬物の売人として得たものであり、次のように「どうしたら金が稼げるか」を常に考えていたと語っていた。

2-3　暴走

Kくんはある暴走族に所属していた。

土曜の晩は絶対暴走するわけ。俺、暴走族の一員やってんけど、みん

ないつも公園でたまんねや、そんで総長おるやん。集まったら、大阪の街をぶっ飛ばす。今じゃそんなこと絶対やったあかんで。

暴走族に入ったことは、Kくんの人生に大きな影響を与えている。暴走や薬物など自身の行動面での変化に加え、関わる人も変化しただろう。それによって、少年院や刑務所に入ることにもなっている。Kくんは当時どうして暴走の道に進んだ理由を「暴れていないとストレスを発散できなかった」と語っていた。

2-4　学校

1970年代から1990年代は校内暴力が社会問題として取り上げられている時代である。生徒同士の暴力沙汰や教師からの体罰の他に組織的な暴走が繰り返し行われていた。Kくんは真面目ではなかったが学校には通っていた。そこではKくんも教師の車を破壊、無免許運転での登校、教師との殴り合いなどが日常茶飯事であったと語る。

学校行ったり、行かへんかったり。（学校には）俺ら車で行ってた。盗んだ車で。

廊下を単車で走るのはひと昔前。運動会で、みんながリレーやってるとき、俺は単車で走ってた。最後のストレートを狙った。

2-5　教護院

Kくんは少年院や刑務所の他に、教護院に入った経験がある。教護院とは14歳未満で教護処分を受けた少年を収容する施設である。教護院は子どもを拘束する機能がないため、鍵つきの部屋に入れたりすることはできない。Kくんは、そこでのある程度自由な生活の中で何度も脱走を繰り返したという。

鑑別所は 14 歳からなんだけど、教護院ってとこに入れられた。その教護院っていうのは、もうむっちゃ開放的な施設。勉強して、寮かえって寝ます、みたいな。鍵も締まってないし。だから俺はそこで 6 回脱走してんねん。捕まったけど。コンビニの前で捕まった。あほやから、地元帰ったらコンビニの前でたまるやん。

2-6　少年院

K くんは、3 度の少年院経験をこう語る。

先生おらん時間いっぱいあるから、娯楽時間とかいっぱいある。むっちゃ面白かった。逆に犯罪覚える。

娯楽時間には、何をして捕まったのか、またどのような犯罪の手口を使っていたのかなどを話していたこともあったと語っていた。そのため、自分が考えつかないようなやり方を聞くことが出来たりして、新たな発見などもあったという。

（ルール上は）しゃべったらあかん。けどしゃべっとった。8 人部屋で 1 人パシリみたいなのおるねん。ほんで見張りついとけ、みたいな。（失敗したら）そいつはしばかれる。俺も、一回だけしばかれたことあるし。入ったときは。

娯楽時間には、先生に見つからないようにパシリを一人作り、パシリに見張りを行わせていた。パシリの制度は通過儀礼のようなものであり、新入りが担当するようになっている。しかし、新入りでも、見るからに強そうな新入りが入った場合は、このようなパシリを経験することはないのだという。強いものが上に立つという不良特有の上下関係のようなものがうかがえる。

自分が住んでいた街はヤンキー多いし、X 地域のあの人知ってます、みたいなこうゆう話になってそっから仲良くなっていくのが、少年院とか施設のあれやねんけど。

少年院には、K くんのような暴走を行ったりしている人が多く集まっていた。そのため共通の知人の話題であったり、暴走関係の話題で話があったりなど、気の合う人も多く、少年院は新しい出会いの場のような役割を果たしていた。そしてその繋がりは少年院を出てからも続いていたそうだ。

このように K くんは、少年院で過ごしたことを、暗いイメージをもつようなことはなく、あくまで楽しかった思い出として振り返っている。

2-7　地元の環境

K くんは、現在と自身の少年時代を比較して、当時の方が良い時代であったと語っている。

近所のおばちゃんが、俺のとこ来て「警察おんで！」って。ベランダに逃げたら、隣のおばちゃんが「どないしたん」って。「警察や」って言ったら「隠れや」って。今とは違う。X 地域（K くんが育った地域）ってそういう街。

このように、母親を含め周りの大人は、K くんの行動に対して寛容であったことが分かる。当時の少年たちは、非行とされるようなことをしてはいたが、地域の中で嫌われている存在ではなかったのだろう。非行少年を警察から匿うことは、法律上許されることではないが、地域の住民同士の関係が強く、良くも悪くも少年たちは地域の大人たちに見守られながら過ごしていたことを示すエピソードである。当時に比べて現在は、地域の繋がりが希薄であり、普段大人たちは地域の少年たちに対しあまり関心をもっていないにもかかわらず、少年の非行や問題行動は厳しく取り沙汰される時代である。こういったことを K くんは「今の子はかわいそう」だ

と語っているのかもしれない。

Kくんの語る「ええ時代」とは、当時の人情味のある時代柄によるものであるだろうが、Kくん本人は、X地域の地域柄でもあると語っている。加えて、開発が進みX地域の姿が変わっていくことに対して、「おもんない」と発言しており、Kくんは地元への愛着が強いのではないかと思われる。

2-8　転換点

Kくんは成人し、覚せい剤取締法違反で二度の刑務所を経験する。最後の刑務所から出所した時に、Kくんはやくざの道を歩むことを決意した。出所後妻との出会いを果たしたが、その頃も「悪いこと」を行っていたという。

> 最後の刑務所出てきてから、絶対やくざやったろって。真面目になんかやってられるかいって。ええもん食ってええ服着て、みたいなやったろって。

しかし、そんな彼に転機が訪れる。それが第1に、結婚であり、第2に長男の誕生である。この2つの出来事を契機に、彼はやくざの道から足を洗うことを決めたのだ。そこには、汚いお金で子どもたちを養っていきたくはないという思いがあったという。

> （子どもが）できたから、付き合って4年目で結婚したんかな？そっからやな、目覚めさせてくれたのは。

> 悪いことしてた方がお金は儲かる。でもな、その汚いお金で、養っていきたくはないなって。

以来Kくんは建築会社に勤め、真摯に働いている。子どもが出来たことがKくんに大きな影響を与えたのである。そして、彼は同時にこんなことも語

る。

後悔はしてないかな。こういう生き方してきてよかったなって。仲間もいっぱいできたし。

Kくんはこのように過去を振り返る。かつての非行をしていた自分もひっくるめて自分であり、非行をしていた自分がいなければ、今の自分はなかったという。そう語るKくんの様子に、過去を後悔する様子は一切感じられなかった。

2-9　まとめ

私たちは、Kくんの話を聞く中で、専門知と異なる点があることに気が付いた。それは、少年院内での過ごし方についてである。少年院では、交友関係のある少年らは異なる少年院に入院させ、院内では21時以降の会話を禁止することがあるという。そうすることで、少年をこれまでの環境から切り離し、院内でも新たな交友関係が生まれるのを防いでいる。

しかし、Kくんの語りからは、少年院の狙いとは真逆のことがうかがえた。上述の通りKくんは、当時の少年院を「逆に犯罪覚える」「仲良くなっていく」と振り返る。同室の少年らの中で「見張り役」を作って職員の目を盗んで会話をしたり、共通の知人の話がきっかけで見ず知らずの少年と仲良くなったりしていた。Kくんらは、少年院の狙い通りにこれまでの交友関係を絶ち切るどころか、少年院の中で新たな交友関係を築き犯罪の手口を学んでいたのだ。

（加藤汐梨・藤田桃萌・林純太朗・有賀大雅・葉田愛美・杉田彩夏）

3　専門知と経験知の溝とそこから学んだこと

以上のような形で、本章では、本研究プロジェクトから着想を得た専門職

の視点と当事者の視点の間に存在する「溝」についての現役の大学生によるレポートを行ってきた。最後の、これらの共同研究が、学生の具体的にどのような学びにつながったのかについて提示する。以下に、2 名の考察を紹介し、本稿を終えることにしたい。

3-1　「更生」とは何か

私は、少年院の取り組みと少年の認識の間に、大きなギャップを感じた。少年院は少年の改善更生を目的とするが、そもそも少年自身には「更生」という概念がない場合があるように思う。K くんが語りの中で「更生」という言葉を使わず「目が覚めた」と表現していたように、K くんの中で過去と現在の自分は一貫し連続しており、K くん自身に「更生」したという認識はない。少年院で「更生」したように見えたとしても、それは第三者が少年の一時的な行動から勝手にそう判断したものであり、少年自体はほとんど変化していないのではないだろうか、と感じた。

（加藤汐梨）

3-2　未来の選択肢を広げる必要性

少年院訪問と K くんへのインタビューを通して、職員側と少年側での「少年院を出た後の未来」にズレがあるように感じた。少年院では、社会復帰を目的とし、学校のような教育活動、出所後に就職で困らないように資格取得の奨励、就労支援を行っている。しかし K くんの話を聞く限り、少年院での生活は彼の人生を考え直すきっかけにはならなかったようだ。少年時代には一般的に学校に通い、勉強、部活をし、他者とのコミュニケーションをとりながら成長していく。その時期に少年院にはいることは、1 年近く社会と断絶されていることであり、少年たちは出所しても限られた未来しか描けないのではないだろうか。本当の意味で少年たちの社会復帰を望むのであれば、少年たちの未来を広げていく必要がある。それはより多くの資格取得や幅広い

企業との連携ではなく、学校や地域に戻っていくという選択肢を与えることだと感じた。

（藤田桃萌）

謝辞　インタビュー調査にご協力いただきましたＫくんおよびＫさんのパートナー、息子さん、娘さんにこの場をおかりしお礼申し上げます。